

「■オピニオン (首長インタビュー：飯舘村)」

「震災から10年：ワクワクする村づくりのための村学連携」

飯舘村長インタビュー

Ten Years After the Earthquake: Village-University Collaboration for Creating Exciting Village
Interview with the Mayor of Iitate Village

杉岡 誠¹ 溝口 勝^{2*} 石井 秀樹³Makoto SUGIOKA¹ Masaru MIZOGUCHI² Hideki ISHII³

石井: 本日は、どうぞよろしくお願い申し上げます。復興農学会は、2020年6月29日に発足しました。この学会は、東日本大震災、福島原発事故だけでなく、国内外における自然災害、原子力災害からの復旧・復興をふまえた、農学、農業の知見等々、広く発信していこうと、そういう志を持った学会として立ち上げたところです。まだまだ取組みがスタートしたばかりで、至らぬところがございますが、今回、杉岡村長におかれましては、震災からの10年を総括していただきながら、これからの飯舘村に対するいろんな想いや抱負をお聞かせいただきつつ、復興農学会への期待や叱咤激励など、忌憚なくお寄せいただければと思います。それでは進行と聞き取りは、東京大学の溝口先生にお願いしたく存じます。

溝口: 今日、杉岡村長に飯舘村の5つの政策について色々お聞きしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。杉岡村長とは、杉岡さんが農政係にいる時から学会や講義を通して情報交換していました。ですからこれまでの飯舘村については村長のインタビュー (https://hbh.center/02-issue_06/) を参照して頂くことにして、今日はむしろ現状と未来について伺いたいと思います。

まず現状です。すでに2020年10月末に村長になって半年になりますが、実際に村長として動き始めた中で役場の職員の時との違いを教えてください。

杉岡村長: 一番の違いは、村長は、物事を決断する、決定する立場であって、また村としての広報マンという事です。そこが非常に大きく違うと思います。職員の時代では、自分が前のめりに提案というかたちでいろんなことができることもありました。今の立場では決断ということに変わったと思います。

溝口: なるほど、このあたりは菅首相に聞かせてあげたいですね(笑)。やっぱりトップになると一番大事なものは決断力なのですね。そういう意味でも村長には期待したいところです。違いが分かったところで、広報いいいて令和2年11月号の中にある新村長の就任挨拶について伺います。

【画面共有：広報誌】 <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/uploaded/attachment/11340.pdf>

こちらで5つの政策を掲げておられますね。

- ① 生きがいと生業の力強い再生と発展
- ② 健康で生き生きと楽しく暮らせるふるさとづくり
- ③ 情報通信技術 (ICT) による新しい村づくり
- ④ ふるさと資源のフル活用
- ⑤ 生き生きとした学びの場を育む

私が一番注目したのは3番目の「情報通信技術(ICT)による新しい村づくり」です。私は飯舘村に通うようになって10年目になりますが、私自身はこれに一番いちばんやりがいを感じながら取り組んできました。村長ご自身は具体的にどのような内容を考えて、この3番を政策に掲げたのでしょうか？

¹飯舘村役場 ²東京大学 大学院農学生命科学研究科 ³福島大学 食農学類

¹ Iitate Village Hall ² Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

³ Faculty of Food and Agricultural Sciences, Fukushima University

Corresponding Author*: amizo@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

2022年1月27日受理。(インタビューは2021年5月17日にZoomオンラインで実施された)

杉岡村長：この政策を掲げた時点での私の想定の話となりますが、いくつかお話をすると、震災前から飯館村には、いわゆる地デジの難視聴世帯を想定した光ファイバー網が整備されていました。しかしながら、村民の方々の75%ぐらいが帰村されていない中では、その光ファイバー網をうまく使い切れていない認識がありました。今ある資源をうまく使うことで、できることがあると思っています。

もう一つは、震災があった平成23年は、今ほどスマートフォンが普及していない時期でした。だいたい携帯電話かPHSで、この10年間でスマートフォンを持つようになり、情報通信そのものをかなり使うようになってきたということです。5Gの普及の話もありますが、情報過疎になる地域は時代に取り残されてくるという想いがありますので、新しい整備も必要だと思っています。

それから溝口先生からいろいろとお聞かせいただいておりますが、IT技術の農業分野への応用に関する国の政策もあると聞いておりますので、そういったものもうまく活用できないか、ということが私の中にはあります。

溝口：ありがとうございました。国の政策については一昨日「東大むら塾」の学生に講義をしました。これはそのときの資料です。https://www.maff.go.jp/j/budget/pdf/r3kettei_pr64.pdf#page=6

今、村長が言われた情報通信環境整備というものを2021年から農林水産省が新規予算で始めました。この中に「情報通信環境整備」という用語が出てきます。飯館村は山に囲まれているので通信環境が悪いところもあります。でも逆に電波が届かないからこそ、私はこの制度を活用して飯館村の通信インフラを整備するチャンスと考えています。村の全区域で誰もがコミュニケーションができるようにして村外の親戚と簡単に連絡が取れるようになったら面白いと思っています。

実際、私は2020年12月から飯館村の80過ぎのおじいちゃんと毎日のようにZoomで話をしています。一定の通信環境があり、そこにZoomがあれば話ができるようになります。村全体でそんなコミュニケーション環境を作ったら面白いと思います。こうした技術をお年寄りに誰がどう教えるのかが問題ですが、たとえば都会の大学生と村民を繋いで、マンツーマンの交代制で毎日教えるとリテラシーも上がります。それが村外のお孫さんとのコミュニケーションツールにもなります。このようなアイデアは、いかがでしょうか？

杉岡村長：まさしく私は、この話の中でそういうことを申し上げていて、たとえば今、社会福祉協議会の職員が高齢者の全世帯を必ず回るようになってきているのです。そういう方々が、そういう使い方を教えながら回るということで、ICT機材の使い方を教えることもまた、人と人を繋ぐということにもなるだろうと考えています。あるいはそこに新しく参入してくる人達も出てくるだろうという想いがある、私としては、溝口先生がおっしゃることも考えています。

ただ行政的には、どうしても公平性が非常に求められる部分があるので、たとえば対象者がひとり10人、20人程度であれば、できるのかもしれませんが、高齢世帯が例えば500世帯あり、そこに1000人近くいますよとなると、その1000人に対してどういう順番でやるのだという話が当然出てきます。

溝口：ワクチンと一緒にですね(笑)。

杉岡村長：ですから時間はかかったとしても、ある程度のスパンの中で、ある程度の広がりを見せるということが求められるので、ちょっと今その辺りを考えなければいけないと思っています。

ワクチン接種の件も、先週から社会福祉協議会の人たちをお願いをして、65歳以上の世帯に全戸訪問をして、「自分で電話予約ができるか」ということや、あるいは福島市と協定を結びましたので、福島市内での接種について、「自分で足を確保できるか」というようなことを、約800人の対象者がいるのですが、全部聞き取り調査を今始めております。このような中で、それがどれぐらいのタイムスパンでできるか、ということを試しているような状況です。

溝口：私は1993年からインターネットを使っていて、当時は三重大学の学内LANの整備にもかかわって来ました。その経験でお話しますと、公平性を保ちながら普及する課題に関しては、最初は公平性を度外視しても物事にのめりこむような特殊な人に慣れてもらって、その人が伝道師のように周りに伝えていくような環境を作ることが大事だと思います。そういう意味では、村のやる気のある高齢者に重点的に学んでもらって、その人から知り合いの方に教えてもらうようにすれば、あっという間に浸透していくのではないかと期待しています。

杉岡村長：その辺りの取り組みの手法も、まさしく私が農業関係でやってきた部分でもあります。意欲のある方をモデルにしながらまずは成功事例を作る。そこから広がりを見せるという部分があるかと思っています。実は、いま

村内においても足の確保というところで非常に課題が多くなってきています。たとえば、あと3年、5年後に、自分で隣の家まで行けるかっていうことですら、相当困難になる方もいるかと思っています。ですので、そういう足の確保というか、ドア to ドア、そういうことを含めて施策というものは考えていかないといけないと、私としては思っております。いわゆる情報通信技術が、そうした人と人とのつながりを改めて作る部分だとすると、そこに対して足の確保の部分も併せ持つことによって、なおコミュニケーションとか、そういうことができるのではないかと思います。私としては、いわゆる一石二鳥ということを考えますので、そういう施策を検討したいと思っています。

溝口：今、足の確保という問題の指摘がありました。飯舘村では無人ビークルだとか車の自動走行実証実験をやっているという話を聞いていますが、そのあたりの実用化や導入の計画はあるのですか？

杉岡村長：去年、環境省の管轄事業で、無人ではないのですが、たとえば道の駅と役場を低速ですが繋ぐような形で低速運転をするグリーンスローモビリティをやっていたのですが、実は、その事業は今年採択されませんでした。

その事業の趣旨は、都会型のニーズを想定していて、ひっきりなしに大人数を運んでゆくというような方向性で事業が運んでいたのですが、私たちの村のニーズには合致していなかったようです。

飯舘村は、東京23区のうち10区ぐらいが入るような広さがありますから、そういう中をスローモビリティで移動するのは非常に難しかったのかなど。飯舘村としては、各集落毎にそうした移動手段があっても良いのではないかと提案をしたのですが、なかなかそれは受け入れられなかった、ということです。ただ一回できなかったからと言って、諦めるのではなくて、飯舘型の村に合ったものを今後も検討していきたいと思っています。

溝口：いつも飯舘村を訪問する時に思うのは、福島駅からバスで「までい館」までは行けますが、そこからは知り合いでもいなければ動けない。だから例えば「までい館」にレンタサイクルを置いて、村内のあちこちに行けるようにできませんかね。

杉岡村長：そうしたアイデアをどういう形だったら持続性をもってできるかを判断するのが私の立場なので、私の中にアイデアがあればできるということでも、ないのですよね。それは私がやるのでしたらできますが、やはり持続性をもってそれがしっかり受け入れながらやっていく体制をとるのが私の仕事であります。アイデアはどんどん寄せいただきながら、それができる体制を同時に考えていくのが、私としてやらなければならないことと思っています。

溝口：それは具体的にどのような手順を踏んだら良いのでしょうか？ 前村長の時代にも、レンタサイクル等のアイデアメモをお渡しましたが実現しませんでした。

杉岡村長：そもそもアイデアから始まることは、そのアイデアを出してくださった方がニーズをつかんでいるということなので、どういったところにニーズがあったのかということから検証しないと、行政的には動きません。行政はニーズを再検証する必要があると言うことです。税金を投入する以上、税金を投じたらそれを回収できるのか、それだけの効果が生めるのか、ということが、行政として最低限必要なことですから、民間のように試しにやってみて、うまくいかなければそれが収益化されなかったのだね、という終わり方はできないということです。行政に非常に固い部分があるのですが、それは税金をお預かりして進めている部分が大いからです。ですので、どちらかという行政が全部の資金計画や人員配置計画を含めて検討した上でさらに実施するというよりは、民間のほうでこういうことがやりたいのだけど、何か村としてプラスの支援ができないか、という提案をいただいたほうが、動きやすいと思います。

溝口：なるほど。やはり民間ベースで動けるようなアイデアを実現することを考えたほうがいい、ってことですね。

杉岡村長：そうです。

溝口：私はいろいろ思いついて、それを言うだけなのですが。たとえば今の時期、村内にはきれいな花があちこちに咲いています。面白いのは、飯舘村には花を育てたり、花を自慢したりする村民さんが多いことです。そこ

で見ごたえのあるポイントに、定期的にバスを走らせたりするツアーを企画できたら面白いと思います。これもやはり民間ベースになるのでしょうか？

杉岡村長：そういうことをまさしく地域おこし協力隊の方たちにも言ったりしているのです。そういうことを、大学生たちも交えながらやってみたり、コーディネートしたりしてみたらと話したりするのですが、やっぱりそこに行きつかない部分は、誰か他の人のアイデアだから、というのがあるのかもしれませんが。

実際、松原さんですとか、お花を作っている方々が既にそうしたマップを作っていたりするのです。あとは、そこをうまく繋げていくということなのだと思うのです。それから今、大火山（おおひやま）のツツジが八分咲きぐらいになってきているのですが、非常に勿体ないのです。桜やチューリップだけじゃなくてツツジもある村なんです。こうしたことが繋がると、分散型のいろんな形で地域を楽しめるという、そういう素材活用につながると思っています。

また、今おっしゃっていただいた、バスでツアーを組むというのを行政でまともに考えると、行政でバス運行するには、年間何百万お金がかかるのだ、ということから始まりますから。やはり民間ベースでやりたいという人を見つけていきたいですね。これぐらいの支援があれば、できるよということが、それが経済効果としてこういうふうにつながるんだっていうことが、行政側で試算できることが大事なのではないでしょうか。

溝口：何でもかんでも行政に任せるのではなくて、民間が動きやすいような何かが必要なのではないでしょうか。

杉岡村長：まさしく東京や都会のほうはそうなのだと思うのです。行政が前面に出ながら表に出ながらいろんなことをやるのではなくて、いろんな経済活動やおもしろい活動ができるところを下支えしたり、そのためのインフラを整備したりするのが、本来のあるべき行政の姿だと思います。地方においては、役場が一番の大企業のような扱いにもなっていますので、その部分が、いろいろと議論が分かれるところかとも思っています。

溝口：そのあたり、もっと若い人が良い形で村に入ってきて、アイデアを互いに出し合って、民間ベースでやりだせたら面白いですね。

杉岡村長：そうだと思いますよ。逆に言うと、今そういうことができる気風になっていますので、地域おこし協力隊がいろんな活動をしながらか、あの活動面白いなとか、認知も増えてきていたりするので。まさしくそういう活動が、昔の飯舘ではなかなか難しかったと思いますが、今はそういう新しい風に対する追い風といいますか、少なくとも向かい風にはならない雰囲気には、なっていると思います。

溝口：では次に政策の4番目「ふるさと資源のフル活用」について伺います。ズバリ村長の考えるふるさと資源とは何ですか？

杉岡村長：私は「農」という言葉を使っております。「農」というのは別に農業をやる人だけの言葉ではなくて、人の人生であったり、歴史であったり、あるいは風土であったり、風景であったり、そういう様々なものを含めて農という言葉があると思っています。ここから派生して、飯舘にある、皆が気づいているか気づいていないかは別としても、価値あるもの、残していきたいもの、残せるものというものは、「ふるさと資源」になってくると思っています。いろんな定義が皆様にはできるだろうということで、私としては「ふるさと資源」という言葉を使わせていただいています。私の頭の中にあるものだけが資源ではなくて、各々が新しいスポットを当てながら、輝かせて、新しい価値を発信していくことができるものが、村にはたくさんあると思っています。

溝口：「ふるさと資源」の中には、村にいる人にはわからない、逆に都会の人だからわかる「ふるさと資源」もあるような気がします。私は田舎育ちなのであまり驚かないのですが、学生を飯舘村に連れて来ると、夜中に空を眺めたら星が降ってくるぐらい近くに見えるなどと感動しています。ですから普段田舎の生活を知らない都会の学生が村を訪問した際に見出したふるさと資源をピックアップして観光資源にしたら面白いでしょうね。

杉岡村長：まさしくそういうことを私としては期待している部分があります。私自身が、今となっては村人になったと思っていますが、元々、東京、神奈川のほうで生まれ、育ち、そこからアイターンで村に来た人間ですので、今でも村の中の毎日が発見といいますか、こういうものがあつたり、こういう人の笑顔があつたり、そこに根差すそういう人々が形作ってきた風景やいろんなものがあるのだな、ということが、私自身、常に楽しんでい

ます。あるいは雪が降っても、普通の人は、寒い、雪掃きは嫌だ、と言うのでしょうか、私は雪が降るのは好きなんですよね。雪掻きができるというのは、そこに自分の思う雪掻きの跡を作れるわけですから、そこに楽しみを感じています。そういう奇特と言いますか、田舎を愛して楽しめるという方々ならではの発見というものが、「ふるさと資源」の発掘、あるいは活用ということにつながっていくと思います。

溝口：この10年間飯館村に学生を連れてきていますが、特に最近「東大むら塾」という「農業と地域おこし」をテーマにしているサークルの顧問をしている関係で、飯館村を活動拠点にしようと提案して一昨年農業委員会会長の菅野啓一さんと一緒に蕎麦作りをしました。彼らはその経験を通して、今まで気づかなかった田舎の良さ（人の心の温かさや優しさみたいなもの）に感動しています。そのように大学生の訪問が都市と地方の交流モデルになったら面白いと思います。もちろん杉岡村長も同じような考えなのでしょうね（笑）。

杉岡村長：まさしくその通りですね（笑）。やっぱり農業委員会の会長も、ぜひああいう取り組みは広がっていかなくちゃならない、ということ、会報の中でもお話していただきましたし、ほかの方々もぜひ農業委員会の会長だけでなく、自分たちのところにもかかわってほしいという話もありました。それがここ2年、このコロナ対策の中でなかなかうまくいっていない部分もあると思いますが、やはりこういう時期に想いを温めながら、芽を出せる時にドンと出す、ということが大事だと思います。まさしくそういうモデルになれば、と思います。

溝口：村での活動について、いろんな大学のいろんなグループが同じようなことを考えて、バラバラに村のどこかにコンタクトしていると思います。その交通整理は、どんな方法がよろしいでしょうか？ 例えば、学生と村との関係という意味では、私のような大学教員が間をとるもつ方式もあるだろうし、それから学生のサークルの代表が村役場の誰かに直接コンタクトをとって進めていくケースもあるでしょう。しかし村役場にすれば、いろんなところからランダムに来られると仕事が大変になると思います。

杉岡村長：これは一番大きい問題でして、多分、以前に4大学（東大、福大、大阪大、明治大）、その窓口を私がしていたのですが、本来そういう協定大学とのやりとりというのは、村でいうと、企画係という担当がそれを担うことに旧来からなっていたのですが、企画のほうでも、なかなか農業系のテーマが多かったので、できないという話で、私が率先して引き受けたという経緯が、職員時代にありました。今現在、それを引き受けられる体制があるかという、これは非常に難しいと思います。なぜかという、東大むら塾の方々も、話が農業系に限定されるわけではないと思います。地域づくりですとか。そういったことにまさしく関わる部分なのですが、役場ではやはり縦割りになっていたりするので、それぞれの担当が自分の担当部署の中で判断すべきもの、あるいは形成すべきものですから、総合的に誰か一人を窓口にしなから、できるという体制には、残念ながらまだ村はそこまで成長しきれてないと思います。なので、ワンクッション置いて、先生だったり、いろんな方々もいらっしゃるのですが、やっぱり大学を、全体を総括するというか、情報を共有して総括してくれる方がそこにいたほうが、私たちはやりやすい。そうすると窓口になっている先生と、役場の中ではその話というのはこの部署が担当していますよとか、ここの部署とここの部署と同時に話をしたほうがいいですよということが言えたりもしますよね。それを学生さんが直接やろうとするとちょっと難しい部分もあるかなという気がします。

溝口：同じようなことを私もずっと感じていたので、この質問をしたのですが、実は先週だったかに、研究面でも、「こういうことをやれないか」という相談を受けて、「多分できると思うけれども、これはちゃんと村との関係もあるからそこを通してやらないとダメだよ」ということ言ったら、ちょっと先走って直接電話をしたみたいで。その先生が私の同級生だったものだから、そのあと「先走ってはダメだよ」と注意しました。おそらく今の飯館村の中で、いろんな大学や研究者を含めて、いろんなことをやってみたい、あるいはいろんなことをチャレンジしてみたい、という人はいると思います。それがバラバラになると本当に迷惑をかけてしまうので、まさに村長が言ったように、何らかの形で交通整理役を誰かが引き受けないといけない。自分でいうのもなんですが、飯館村でいろんな研究ネタだとか学生ネタだとか私が一番理解しているだろうから、私がそういう役をやらないといけないかなと最近思っています。そういう場合に、どういう立場でやればいいのかね。

杉岡村長：立場が必要であれば、そういう立場を作ることもあり得ると思います。逆に行政側の立場の部分と、大学を含む民間側の立場という、それぞれ別の土台があるべきなのだと思います。たとえばその中に行政も入って、そういうコーディネートするような会を立ち上げたほうがいいというのであれば、そういうやり方もある

と思います。

溝口：それこそ大学側と役場側の調整室のような会を作り、月に1回各グループから簡単な報告をしてもらって、1時間ほどZoomで意見交換するだけでもずいぶん違うと思います。

杉岡村長：定期的な報告は、月1回だと職員には大変かもしれませんが、それぐらいの頻度なら、それはそれで村としては非常にプラスの部分があるかと思います。私自身は大学とか学生さんの活動が多岐にわたることは認識していますが、じゃあ職員全員がそれを認識しているかという別問題です。言ってみれば私が就任するまでは、地域おこし協力隊の方たちがそれぞれ何をしているのかということすら、職員はほとんど知らない状況もあったので。実は役場の中で、たとえば「ほっとコーナー」を使ったり、会議室を使ったりしながら、自分たちのやろうとしていることのミニバージョンをやってみませんか、ということで、実はそれぞれやってもらったおかげで、職員の認知度がかなり上がったということがありました。担当に限らず、放送で流しながら、いわゆるプレゼンテーションというか、こんなことをやっていますよという報告会があっても、全職員を対象にでも結構ですから、あってもいいかなと思います。

溝口：具体的に会合をするのに適当な時間帯はありますか？ 昼休みとか、5時以降とか。研修みたいな形がいいですか、それともそれは別の方法が良いですか？

杉岡村長：定期的にやるとすれば、毎回出れる人はなかなかいないと思うので、自由参加の形でたとえば5時半から、例えば1時間かけてという形で、「今日はこの大学がこんな発表をしますよ」、というアナウンスを出すような感じでしょうか。

溝口：大学のゼミみたいでそれは結構面白いですね。合同ゼミ方式で各大学が30分ぐらい話題提供して30分ぐらい意見交換して、互いに知り合いになれるのですごく良いですね。

杉岡村長：やってることの共有というのは、やはり顔とか名前とか含めて知らないとだめですね。自分の担当部署の仕事が非常に膨大だったりするので、目を向けない、耳を向けないほうが良いもんですから、そういうやりかたをしている職員もいるので、そこにちょっと風穴を開ける意味でもそれは良いかなと思います。実は、職員向けに放射線教育をやってほしいという思いがあって、溝口先生は本を作っていますよね。

溝口：はい。ドロエモンの「土ってふしぎ」という本です。<http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/mizo/book/doroemon-book.html>

杉岡村長：ああいう本の知識から入るぐらいが、ほんとに素人、村民と同じ扱いで、職員にゼロベースでやっていただくことをお願いできたらと、最近思っていたのです。

溝口：はい、お望みならばいつでもやりますよ。

杉岡村長：新しい任期付きの職員とか、その方々ははっきり言って何も知らないまま、村内での業務が始まっている状況になるものですから、そこを私がバツと喋ってもなかなか難しいので、やっぱり、生徒に教えることに慣れていらっしゃる先生にお願いしたり。あとは、大阪大学の物理学関係の方は、もっとコアな話をするので、初歩的な部分をそういうふうにやりながら、もうちょっとコアな部分は、じゃあ大阪大学さんにもやってもらいますか、というような形で、各大学に話を振りながら、勉強みたいことをできたら面白いと思っています。

溝口：わかりました。それでは今年度の活動のテーマのひとつとして、参加自由で、ゼミのような勉強会を、月1回ぐらいのペースでやります！ こういうものはまず勢いで始めて、続けることが大事です。石井先生もいるので、福島大や大阪大もみんなでやりましょう。これは本日の決定事項ですね。（この対談後の6月から「三水会」と称する東大・福大・阪大・村役場の有志で毎月第3水曜日にZoom会議をしている）

では次に政策の5番目「いきいきとした学びの場」についてお尋ねします。実は私は「ドラゴン桜・飯舘版」をやりたいと思っていました。飯舘村出身の小中高生（希望の里学園）の中から東大農学部に来てくれる学生を今から育てたい（笑）。

杉岡村長：学校機関に関しては、実は行政的には難しい部分があるのですが、だからといって何もしないわけにはいかないと思っているのです。自由参加でできるようなやり方から入る方法もあるかと思うのですね。やっぱり学校教育の場に入っていって、「じゃあやりましょう」と言っても、学校側でその辺はいろいろとコーディネートする部分もあって、生涯学習的な立場から、行政側の立場から、そういう周知をしたり、参加を募りながらやっていく方法があると思います。

溝口：具体的にどうしたらいいですか？放課後とか土日に塾みたいな感じでやればいいのでしょうか？多くの人は福島市に住んでいますよね？

杉岡村長：放課後土日というのは、いわゆる送迎のバスを出す時間というのがありますから、そこは難しいのだと思います。なので、むしろ学校の休みの期間、夏休みとか冬休みをつかまえてやれば平日もありえますので、そういうことも考えなくてはいけないと思います。

溝口：今の小中学生のほとんどは、震災時にはまだ小さくて、あるいは生まれていなくて、震災のことを知りません。故郷が今の避難先というか、飯館村とは違うところになってしまっている。いずれ大人になったとき、祖父母の故郷が飯館村で。その土地の権利を自分が持っていることに直面すると思います。その時に、時々飯館村に帰っていた子と、そうじゃない子とで格差が生まれる。そういう意味では今の小中学生にふるさと意識を持ってもらうことがすごく大事だと思うのですが、具体的に希望の里学園で何か教育の工夫はしているのですか？

杉岡村長：まさしく、ふるさと教育というのをやっています。「飯館学」という名前になっていると思います。この間、「映えない飯館トランプ」というものを作って、新聞記事になりました。「映えない」というのはちょっとひねくれた言い方ですが、面白みをもたせています。スペードマークは伝統行事系の写真が載っています。ハートマークは飯館の農産物関係。ダイヤは村の公共施設。クローバーはお花や風景。そんな感じでテーマを分けて13×4通りの村の学習をしたという成果をトランプにまとめたものです。これは非常に良い教材になっていると私は思っていて、これをぜひ商品化できないかなと思っています。ただ、この中に書かれていることを、職員も含めて全員が全部わかるかといえば、そうでもないのです。トランプで遊びながら、こういうものも村にあるのだな、こういう風景もあるのだな、こういうものもあるのだな、ということができると。ワンパターンではなく毎年作り変えることもできるでしょうし、学びの成果として冊子を作るよりも、もっと宣伝効果なり波及効果が期待できると思っています。昔でいうところのボードゲームを作る方法もあるでしょう。遊びながら、という要素を盛り込むアイデアを、子供たちが作ったということは、非常に大きいなと思っています。

溝口：「飯館人生ゲーム」なんて面白いですね（笑）。

杉岡村長：楽しみながら学ぶということができたらいいと思いますね。

溝口：「飯館人生ゲーム」、Iターンで神奈川から飯館村に入ってくる、「村長になる」とかね（笑）。

杉岡村長：さっき溝口先生がおっしゃったように、私自身、飯館村で生まれたわけではないのですが、祖父母が暮らしていたこの村が、自分の田舎として楽しんでいたところが、自分が終の棲家になりたい場所になって、今こういう立場になっても自分の責任を果たしていきたいという思いに至っていますから、まさしくそういう世代を超えての思いの伝播というものは、当然これからあると思っています。そこが村としての希望であったり、夢であったりするのだと、今思っています。

溝口：希望の里学園で学んだ子たちが、20-30年後に、飯館を自分たちの村だと思えることが大切ですね。

杉岡村長：私からすると、20年も先ではなくて10年後だと思っています。中学生ですからね。

溝口：そうか、10年で大学卒業ぐらいですね。

杉岡村長：そうなのです。実はそんなに遠くない未来に、彼ら彼女たちの想いだったり、いろんなものが具現化

するための土壌づくりを、私が今やっておかなくてはならないとも思っています。

溝口：そこに戻ってきて芽が育つような感じの、畑づくり、ですね。

杉岡村長：そうですね。

溝口：私の研究室に大学院から入って現在農林水産省で働いている飯舘村出身の元学生がいますが、彼は飯舘村に関心を持ち続けていて、大学院生時代に作ったLINEグループに、今月号の「広報いいたて」にスイセンの記事が出ているぞ、などと流したりしています。彼に「お前は今後どうするのだ」と聞いたら、自分にできることは何かをずいぶん考えているみたいで、「杉岡さんが村長をやっているから、自分は農水省官僚だから、自分が持っている情報をうまく活かしながら自分にしかできない形で村を応援したい」と言っていました。

杉岡村長：ありがたいです。

溝口：そういった形のサポーター（いずれは村に帰るけれど何らかの形でバックアップしてくれる）人脈作りが大切だと思います。

杉岡村長：おっしゃる通りです。

溝口：いまの中学生がこれから先どういう想いで高校、大学にいて、どういう風になっていくか、彼らの将来を考えると、繰り返しになりますが、今の飯舘村の生活を少しでも体験しているか、いないかの違いがすごく大きいと思います。そういう意味で、「飯舘学」の中身が気になります。

杉岡村長：おそらく「飯舘学」そのものは、教え込む意味での学びではなく、自分たちでいろんなところに行ったりしながら発掘してくる要素を大事にしていると思います。今の校長先生は、もともと飯舘村にいた方がなっておられますが、先生は村に住んでいた方々だけではなく、殆どが新しい先生方です。特に20代の先生は、震災の時は何歳だったのか？なんて先生もいらっしゃいます。教え込むのが学びではなくて、自分たちでつかみ取る、自分たちで学びを発表する、といった大学生に求められるようなやり方を「飯舘学」ではしていると思っています。もう一つは、高校生になると、村の中に高校がないので必ず村外の学校に行くことになるのですが、そのタイミングというものが、先ほど溝口先生がおっしゃったような、青田刈りではないですが、東大を目指した勉強をするタイミングとして、もしかしたら、より良いのかもしれないですね。

高校生になると、外の世界に行くことになる、むしろチャンスでもあるので、そういうところも掴んでいけたらよいのではないかと、思っています。

溝口：結局そうですね、高校生になって初めてどう生きるのかとか、じっくり考えていくのかな。そういう意味では日本中どこでも一緒ですね。

杉岡村長：ある意味、高校時代が村から完全に離れる時期なのですよ。子供たちにとって。ですので、その時期に村のことをテーマにしながら、その先の自分の未来のことを考える、ということが出来るかと。

溝口：昔の元服みたいなものですね。

杉岡村長：<https://confit.atlas.jp/guide/event-img/jpgu2019/HCG34-02/public/pdf>

政策に掲げた1番目の「生きがいと生業の力強い再生と発展」について話をさせてください。先生はご承知だと思いますが、「生きがい農業」という定義をしたのは私が農政にいる時です。それも今となっては当たり前だと皆さん受け取っているかと思いますが、あの当時は決して「生きがい農業」という言葉はなかったのだと思います。農業といたら必ず生業としての農業の部分しか、基本的に国についても県についても認めていなかった状況があったのですが、わざわざ「生きがい農業」というやり方で予算をつけてやってきた経緯があります。いわゆる「飯舘村営農再開ビジョン」においても、農業のかかわりをステップに分けて示していて、それが今の私の政策にもつながっています。農における「生きがい」と「生業」という言葉は、私の中では不可分なのですが、村行政では、収入を得るための方策としての「生業」という言葉を使ったり、そこまで至らないけれども自分で

何かをする行いとして「生きがい」という言葉を使ったりしています。これも様々なとらえ方ができる言葉であるものの、大事にしたい言葉だということをお伝えしておきたいと思います。

溝口：まさにこの「生きがい」がものすごく重要だと思います。というのは小宮の大久保金一さんと話していると、何であそこまでこだわっていただけるのかと。結局、生きがいなのですよね。最初、金一さんはすごく身構えていて、何か知らないけど東京から先生がやってきた、何だ？という感じで警戒していましたが、だんだんそれが氷解して、今は本当に冗談を言いあえるという関係になりました。ただ、金一さんは、あれだけ絶望的な状況に追い込まれて、どうしようもないと諦めかけていた時に、自分には花づくりがある、それが生きがいだと言って。それを一緒に除染の実験をやってくれた人たちとか、人生で絶対に会うことがなかったであろうというアメリカ人やドイツ人が自分の家にやってきたと。この感謝の気持ちを何か表そうと花壇づくりを始められたのです。そういう生き方を見て、本当に人間にとって生きがいはすごく重要だと思えたとし、それを杉岡村長が政策として掲げているのは大ヒットだと思います。

杉岡村長：ありがとうございます。行政的には生きがいというところは、もともとの行政の中では支援対象ではないのだと思うのです。それは通常のライフワークの中で見つけていくものだというのが原則かと思いますが、この被災地、ふるさと飯館村にとっては、生きがいというファクターが、非常に大きい部分がありますので、これも行政として、村として、しっかり政策の中に入れ込みながら、支援をしたり、あるいは底支えをしていくという、そういう決意をこの中には込めておりますので、先生に代弁していただいて非常にありがたいです。

溝口：あと農業委員会会長の菅野啓一さんと話していて感じるのは、飯館に対するプライドです。先祖に対する尊敬というか。比曽地区の啓一さんや義人さんに共通するのは、「原発に負けてあの時あいつが逃げたからこんなことになってしまったと将来子孫には言われたくない」という一種のプライドというのか負けん気というのか、人間にとって非常に重要な心意気が伝わってくるのですよね。あのお二人には、「俺たちは天明の飢饉の時に生き残った先祖様の子孫でそれを大事に代々受け継いできた」というプライドを感じます。だからそれをぜひ生きがいと結び付けて、今の子供たちに伝えるのが重要な気がします。

杉岡村長：まさしく今、村の中でいろんなことをやっている方々の背中、あるいはお姿そのものが、多分、いろんな学びといいますか記憶として残る中で、いろんなものが将来続いていくんだろうなと私は思っています。今、言葉に直して紡いでいく必要があるものがたくさんありますけれど、むしろそれを姿で見せているという、そこに魂を込めてやっている方が多いので、だからこそこの村は決して負けないし、この先の未来も続くのだという私の確信につながっています。やはり人が力を持っているところが村の一番の強みだと思います。

溝口：2番目の政策「健康で生き生き」については、どうですか？

杉岡村長：健康で、という言葉はおそらくどの行政も言うと思いますけれど、生き生きという言葉を入れさせていただいたところが、強いかと思います。仕方なく暮らしている、どうしようもなく暮らしているのではなくて、自分が選択した生き方であったり、生きがいを見出す可能性を感じた暮らしそのものです。生き生きと楽しく、というところを大事にしたいと思います。これも、行政としては実は実現が難しい概念だと思いますが、難しいからこそ、それを指標にして、目標にして、という言葉の使い方をさせていただいています。

溝口：ありがとうございました。政策に関してはこんなところでしょうか。あと、私が杉岡村長にお聞きしたいのは、生きがい農業の次にある「新たな農業」です。私は菅野宗夫さんのところでICTを使った水田水管理やハウス栽培に関する新しい農業をサポートしてきました。しかし、今実際に取り組んでいるのは宗夫さんや高橋日出夫さんなどのある程度年配者で、次の代の人がまだあまり入って来ていないのが気になっています。そのあたりについてはどうお考えですか。

杉岡村長：まさに園芸、花栽培で、若い世代の方は、私が知っているだけで3軒はいますので、単にその方々が情報を知らないだけだと思います。菅野宗夫区長とか高橋日出夫さんの世代は、ある意味ICTを基軸にしながらいろんな方が携わってきてくれる、というところにも喜びを感じるのだと思うのですが、若い世代というのはどちらかというと、それをツールとして使いこなすというところに、もしかしたら興味を持つかもしれません。そ

れぞれニーズが違って、使うツールは共通して使えるというところがパターンとしてできれば、紹介というか、いろんなことができると思います。少なくとも私が知っているのは、花井純一郎さん、花井ユキさんというカスミソウを作っている伊丹沢の方。それから比曽でやっている須藤さん。新規就農で松塚に入ってきた小原さんがおられます。

溝口：小原さんは、東大むら塾のメンバーと先日 Zoom 対談をやっていたのを黙って聞いていました。ハウスが風で壊れて大変なのに、それを明るく淡々と話していました。

杉岡村長：やっぱり脱サラをして、そこでなけなしのお金を投入してでも農業をやろうという決意してくれた方なので、そこはある意味肝が据わっている部分もあるでしょうし、村としてもいろんなことをやるべきことがあるなと気づかせてくれる、そういう発信をしてくれる人だなと思っています。そういう世代の若い方々、新しい取り組みの方々に、いま先生がおっしゃるような新たな取り組みの中で、ある程度きちっとしたデータを踏まえながら物事に取り組んでいくということが、より早く技術を身に着けるためには大事だと思います。高橋日出夫さんみたいにご自分の感覚の中に確たるものがあって、それは農業委員会の菅野啓一会長も一緒ですが、飯舘村でも3本指に入るような方々の域に達するまで20年、30年とかかるのでは、ちょっとこれは時間がかかりすぎるものですから、それをより短くするためのフォローといいますか、強力に進めるためのツールとして、こういうものがあつたらいいなというのは、私の思いとしてはあります。

溝口：先ほど提案した勉強会の中で、若手の農家さんとも一緒に何かできたらいいなと思います。実際、こんなことをやっています。

【画面共有：フィールドWiFi 機器設置案】 <http://madeiuniv.jp/fukkouchi/education.html>
通常 Wi-Fi はフィールドで使えないので、今、「風と土の家」のルーターから中継器を介して全体を見えるようにして、あちこちにカメラを置き始めました。コロナ禍でなければ、今年も佐須地区に学生を連れて田植えをする予定でしたが、これらのカメラを利用してバーチャル田植えを試みました。こういう技術を村の若い人達に見てもらいながら、村と大学が協力関係を結べたら良いと思っています。このように技術的にはフィールドカメラを使うことを確認しました。飯舘村内のあちこちで使うことをご検討ください。

杉岡村長：ありがとうございます。花をやっている方は、例えば芽かきとか非常に細かい技術の部分を実際にやってみながら覚えていかないとなりません。でも、そこでちょっとした失敗をするだけで非常に大きなマイナスが生じるので、そういう普及指導してくれる先生がいないか探しているのですが、なかなかいらっしゃらないのです。ただ、こういうウェブ会議とか、ウェブカメラを使って、自分が作業するところを流しながら、ネットの先にいる先生が、「そのやり方ではだめだよとか、こういうふうにするんだよ」ということが、もし遠隔でも指導ができると、花の人たちは一番喜ばれるのかもしれない。その技術の習得には何十年もかかるのですよね。企業秘密だったりもするわけですから。

溝口：村内の農家さんが企業秘密でやったってしょうがないような気もするのですが。

杉岡村長：ここは対一（の人間関係）になるのかもしれないね。

溝口：たとえば新規参入の若い農家が目にカメラ、耳にイヤホンをつけて作業しているのを先輩農家が見てリアルタイムで指導するようなシステムを作れば良いですね。

杉岡村長：いや多分、花農家さん同士はそういう教え方はほとんどしないと思います。それはやっぱり自分が得てきた、特定の環境の中でやることなので、ほかの人に合っているかどうかわからないというのがありますし、自分の技術をそんなに軽々とはいえないものです。あくまで私が言っているのは第三者としての先生ですね。花き普及指導の、例えばその地元の中では教えられないけれども、非常に遠い、東北の、福島の中の、小規模農家さんだったら別に教えてもいいよ、という人がいるかもしれない。

溝口：なるほど。同じ産地ではなくてね。

杉岡村長：そうです。そういうニーズのうまいマッチングが、こういうネット社会の中ではもしかしたらできるんじゃないかな、と思っています。

溝口：なるほど。それも面白い試みですね。ぜひ考えてみたいと思います。

杉岡村長：はい。そういう人を見つけてもらえたら一番ありがたいですね。

溝口：今必要としているのは花農家ですね？

杉岡村長：まあ、畜産もありますけれども、畜産はどちらかというとお互いに協力し合う体制があると思っています。やはり大型動物なので。ただ花卉農家さんは、そんなに情報共有を密にはしない傾向があると思います。

溝口：なるほど。ちょっと考えてみます。それと菅野宗夫さんから聞いたのですが、鳥獣害対策も深刻ですね。これについて何か対策を考えていますか？

杉岡村長：営農再開支援事業の継続が決まっていますので、上飯樋行政区のように、集落全体をワイヤーメッシュで囲むことも、実はワイヤーメッシュそのものは無料で村から供給できます。また、それを設置する人夫賃は多面的機能支払交付金の中で払って良いことにしています。ですから、地域の人たちが、たとえば大学生を交えて一緒になって自分の家の裏も含めて、ずっと囲ってゆくことができると、これは対策としてはずいぶん効果はあるかと思っています。ただそれだけでは足りないので、作物を作っている田んぼは田んぼで電気牧柵をまわしてあげる、畑は畑で電牧をまわしてあげるといえることができると、これはかなり、大きな動きになる、というのがひとつ。もうひとつは今年サル駆除の特別対策チームというのを作ってもらいましたので、その中で、サル対策についての検討を深めていくという部分を、産業振興課が農政としてやることになっています。

溝口：メッシュ柵を作る作業で思い出したのですが、私が学生の頃、40年以上前になりますが「草刈り十字軍」というのがありました。全国の学生に呼びかけて、泊りがけで北陸の山の下草刈りをやるみたいな。学生とのコネクションを利用して、草刈り十字軍ならぬ電気柵・牧柵十字軍を飯館村で展開したら面白いと思います。

杉岡村長：そうした草刈りを含めて、都会からいろんな人を巻き込むような構想は多面的機能支払交付金の中にもあったと思うのです。それをやることで、さらにプラスのお金を貰える特別な枠も確かあったはずですが。実は仕組みとしては農水省が作っていますが、先生がおっしゃるような形をコーディネートする人が、じゃあ今まで草刈りを一生懸命頑張ってきた人たちだけで作れるかということそうではないので。やっぱり外側からの情報を持っている人が、先生のような方が、こうやったらできるよね。じゃあ集落のほうではこういうお金の出し方をしたらいいのか、とか、村とこういう調整をしたらいいのか、という仕事の分担ができるといいのかもしれないね。

溝口：いずれにしろ、若い外の力を組み込むことがキーポイントですね。次世代教育も私が力を入れてきた取り組みです。昨年、私の母校である栃木県大田原高校の生徒に飯館村に来てもらいました。村長にも講演して頂きましたね。

海外に対する発信が重要だと思い、ドロえもんの本（土ってふしぎ！）は日本語だけでなく英語版と中国語版も用意してあります。というのは、飯館村は原発交付金とは関係ないのにとぼっちを受けてしまったけれど、その中でなんとか立ち直ろうとしている姿が外国人を引き付けるようです。それが、私の翻訳した **Made in Fukushima** (<https://hachikou.theshop.jp/items/41223231>) のコンセプトになっています。そういう意味でも、積極的に飯館村の取り組みを海外に対して発信してほしいと思います。ご協力しますので。

杉岡村長：そこはまさしく先生にお願いしたいところですね。ただ、私が自分自身の問題として思っているのは、たとえば私が喋っていることも、普通の方が聞いて、うんうんと、すんなり頷けるものと、私なりの違う目線というか、違う視点で物事を言っていることがあって、同じ村民であっても同じ日本人であってもなかなかパッと理解しにくいものがあると思うので、それを海外の人にどういうふうに伝えるかというのは、すぐに思いつかないということ、何回か海外の方から取材を受けたときに思ったのです。

200年前の天明・天保の大飢饉からの復興を果たしたという昔の歴史を持ちながら、というところから話しても、

そういうところというのは海外の方にはなかなか意味が分からないところもありますし、そういうパイオニアとしての魂がどこから生まれているのかということも、なかなか海外の方にずっと理解できるように話せたことがないので、そこは先生なりの解釈といたしますか、こういうことかなという、英訳するときに考えていただければ、さらに同じ日本人に示すのにもいいかもしれません。一回、英語に意識をしてそこから日本語に戻したほうが分かりやすいかもしれません。

溝口：その件に関しては、飯舘村だからという話ではなく、日本の文化そのものの話です。日本の農村文化そのものを海外の人に伝えられるかという話になると思います。ぜひその辺はやりたいと思います。それから松塚地区に作った土壌博物館も活用したいと思っています。小中学生に見に来てもらって、暗渠の知恵や農業の基本的な技術の説明も展示してあるので、ぜひ活用していただきたいと思います。

杉岡村長：先ほど「地域おこし協力隊」の事例でも申し上げたのですが、子供たちが一番教えた対象だとしても、その前のワンクッションとして、ぜひ役場の職員を対象にさせていただきたいと思うのです。行政執行している人間がそういうことを知ったうえで様々なことを考えていくことが大事だと思います。職員が忙しすぎて、いろんな学びが足りなかったなど、私自身反省しましたので、ぜひ職員にもつないでもらえたらいいなと思います。

溝口：月1回のゼミのひとつのテーマにします。いろいろ工夫がしてあります。あとこれは私がよく使うネタですけれども、飯舘で育てた酒米で作った日本酒に「不死鳥の如く」があります。この名前をいろんな人がいいねと言ってくれます。英語版のラベルも作ってあるのですが、まだ公開できていません。

最後に、一昨日「東大むら塾」の学生向けに作ったメッセージを紹介します。

「農業と農村における現場を体験する」、「頭でっかちになりすぎない」、「異なる価値観を学び尊重する」、「農村文化に触れる」。<http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/mizo/public/210515.pdf#page=62> これはぜひやってよと学生にお願いしました。その中で若いアイデアを大事にしてくれと。寺子屋活動でもいいし、プロジェクトでもいいから、自分の若いアイデアを大事にやってくれとお願いしました。注意点として、地域おこしに踊らされるなど。結構いろんなところが地域おこし地域おこしと言って学生を集めるのはいいのだけど、単に利用しているだけじゃないかということがあるので、そういうところに踊らされないで、じっくりと一番目のことをやりなさいよと言いました。それから、基本的にサークルで大事なものは、30年後にも付き合える仲間を今作っておくことで、気楽に楽しんで自ら動く。自ら動きながら自分ができることは何か。役割分担をして、率先して動く。そういう人間関係を作ってくださいと、学生たちにはお願いしたところです。同じような感じで杉岡村長から、東大に限らず福島大の学生も含む全国の大学生に対するメッセージをいただけないでしょうか。

杉岡村長：そうですね。前にも申し上げたのかもしれませんが、学生の方々には、ある意味無責任でもいいから、モノを言ったり、アイデアを出すことを考えてほしいと思います。なかなか被災地のことを学んでからでないと、いろんな配慮をして言葉が出ないということがありますが、そうではなくて、やはり震災の時に私たちが一番大事にしたかったのは次の世代だったわけですから、その世代の方たちが10年を経て大人になっていく中での考えだったり、未来への想いというのが、私たちの力になるのだということです。ある意味無責任に、ものを判断したり、アイデアを寄せていただくということ、ぜひお願いしたいと思っています。若い世代が夢を見るのが、私たちが夢に向かっていくという力を生むということでもありますので、自分たちが何も持っていないことそのものが力だ、ということもありうると、知っておいていただきたいと思います。

そして学会の方々をお願いしたいことは、私自身、農というところの再生を頑張ってきましたが、農という言葉の中に内包されるものをいろんな角度で言葉にしてほしいと思います。私が村の中から考えるものだけではなくて、先生方がいろんな中で考えるものがあると思いますので、それを海外に発信というお話もありましたが、表現をするということが大事だと思います。先ほど申し上げたように、農村の飯舘村の人々の力強さの根源というのはどこにあるのか、ということであったり、あるいは私自身が「村には余白がある」という話を最近していますけれども、例えば東京にいてコロナに感染しないようにしようと思ったらいろんなことをシャットダウンするしかない。部屋の中に籠るしかないのだと思いますが、飯舘にいれば籠らなくてもいい。飯舘村には余白がある分、散歩したり、いろんなことができたり、モノを捨てないでも生きていける環境が、この村の中にはあると思っています。そういう違った価値観も含めて、違う見方をすればこういう見方もできる、というところをひとつひとつ言葉にさせていただけたらありがたいと思います。その二つを皆さんにお願いします。

溝口：今日はありがとうございました。